

幼児教育の成果を踏まえた小学校国語科における 入門期の学習指導の改善に関する検討

A Study on Improvement of Learning Guidance for the First Term of Elementary Schools
Aiming at Japanese Language Departments: Based on the Results of Early Childhood Education

村 地 和 代 水 戸 部 修 治
(滋賀県教育委員会指導主事) (教育学科教授)

今回の幼稚園教育要領等の改訂において提示された、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、小学校低学年における国語科の指導の在り方を検討した。入学直後の小学校第1学年の児童の観察記録及び保育所において見られる幼児の言葉の育ちを比較検討することで、小学校入門期の国語科の授業の課題点を明らかにし、その改善方策を立て、具体的な実践例を提案した。

キーワード：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、小学校国語科、入門期、授業改善、言葉の育ち

1. 問題の所在

令和5年2月27日に中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会から「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」が示された。

ここでは、子どもの資質・能力や学びの連続性を確保し、幼保小接続期の教育を充実するために、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(注1)を手掛かりに、幼稚園、保育所、認定こども園(以下、園)と小学校が保育や授業を工夫していくことを求めている。しかし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」だけでは、具体的なカリキュラムの工夫や指導方法の仕方が分からない。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」については、これを実践にどう生かすのかなど、参考となる資料が少なく、幼保小の教師へのサポートが必要な状況であるということが指摘されている。

以上のことから、幼保小の接続期の教育の質を確保するための手立てを具体的に示していくことが求められており、特に、小学校においては、生活科以外の教科等の指導における具体的

な手立てを示すことが急務である。

また前論考(村地・水戸部, 2023)においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や幼児の言葉の育ちの実態分析を手掛かりとした小学校第1学年の授業実践とその手立ての効果について検討を試みたところである。しかし、幼保小接続の最も重要な接続期である小学校入門期については、その実態把握の難しさなどから、学習指導の改善点を見出すには至っていない。

2. 研究の目的と方法

そこで本研究においては、幼児教育の成果を踏まえた小学校国語科における入門期の学習指導の改善の在り方を解明することを目的とし、次のように、調査及び分析と考察を進めることとする。

(1) 小学校入学直後の児童や教師の関わりの観察を基に、その実態を明らかにする。

(2) 実態把握を基に、幼児期の言葉の育ちを手掛かりとした、入門期の指導の改善の方向性を導き出す。

(3) 入門期における小学校国語科の指導上の

課題を「教師用指導書」における一般的な指導計画例から明らかにし、その改善点を導き出す。

(4) 上記の課題を克服するため、入門期の小学校国語科の学習指導について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を生かし、小学校入門期で育成を目指す資質・能力を明らかにした指導の在り方を提案する。

3. 小学校入門期の実態から導き出される課題とその改善方策

(1) 小学校入門期の国語科学習指導に見られる課題の整理

幼保小接続期の課題とその改善策の解明に際し、研究上の課題として、入門期の児童の実態や教師の関わりに関する記録が取りにくいことが挙げられる。特に、入学直後の児童の実態については管見では分析に供する記録は極めて少ない状況である。また、学習指導の実践分析における重要な記録となる授業研究における学習指導案においても、早くても6月以降に実践されたものがほとんどである。

そこで筆者は、幼児期の学びが小学校へどのようにつながっているのかについて調査した。

なお本調査は、筆者（村地）が所属している滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課における「幼保小の架け橋プログラム事業」の一環として、県内の小学校を対象として行ったものである。（注2）また以下の記録は、筆者が動画撮影した映像及び音声をもとに、特徴として見られる実態を記載したものである。

【入学式後1日目】

児童は、入学式は保護者とともに登校。その

次の日は、登校班での登校である。

A児は、靴箱で上靴に履き替え、迷うことなく自分の教室へ入った。黒板には朝の支度の手順が写真や絵で視覚的に示されている。A児は、ランドセルの中身を机の引き出しにしまい、ランドセルをロッカーに入れた。手には、黄色の帽子。ロッカーの前にたたずみ、唇をかみしめ、黄色の帽子をどこに片付けたらよいのか分からない様子である。先に登校していたB児が、羽織ってきた上着をどこに片付けたらよいか、担任に尋ねている。それを見ていたA児。担任の周りをうろうろするが、尋ねることができない。しばらく考えこんでいたが、同じ教室にいた加配教員（園の保育に参画することにより、幼児教育への理解を深め、幼保小接続を推進する教員）へ、帽子をどこへ片付けたらよいのか尋ねた。加配教員は、「黒板をもう一度見て。」とうながした。A児は再度、黒板を確認することで、黄色の帽子をランドセルの中に入れるということを理解した。そして、ランドセルをロッカーから出し、その中に帽子を片付けることができた。

他の児童も黒板を見ながら、初めての場所、手順であっても自分で朝の支度を行おうとしていた。（※図1）他の友達が困っていたら、手伝う姿も見られた。小学校には、10以上の園から入学してきており、1園から一人で入学していることも珍しくない。初めて出会う友達に声をかけ、協力し合う姿には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「自立心」や「協同性」、「言葉での伝え合い」等の姿が現れていた。

6年生の手伝いがなくても、8時20分には全員が朝の支度が終わった。



図1 黒板を見ながら片付ける姿



図2 自由に遊べるスペース

隣の教室には、自由に遊べるスペースが設置されている。朝の支度を終えた子どもたちは、思い思いに絵を描いたり、本を読んだり、ゲームをしたりしている。(※図2)遊びを通して、初めて会った友達との関わりができつつある。黒板に貼っている時計の模型の長針は、9(45分)を示している。

「もうすぐ9やで。お片付けしな。」

「違うで、9になったらやで。」

9までに片付ける、9になったら片付ける。各園で活動の終わりの時間の示し方は異なっているが、片付け終わる時間を逆算して動こうとしている子どもの姿があった。子どもたちは、声を掛け合いながら片付けることができた。園と小学校との生活の流れは異なるが、見通しをもち、遊びの時間の切り替えができている。

園と小学校のトイレの環境は異なるが、経験を踏まえてトイレを使うことができている。スリッパをどこに片付ければよいかわからず、スリッパが床のあちこちに散らばっている。そこで、トイレの使い方を確認することとなった。トイレの使い方について、担任が「スリッパは、この棚に片付けます。」と説明した。「どうやって片付けたらいいかな。」と投げかけると、子どもたちは、「次の人が使いやすいようにする。」「きれいに入れる。」と次々と発言した。

話し合い後のトイレのスリッパは、とても美しく片付けられていた。

【入学式後6日目】

朝の登校後の片付けは、床を広く使うなど、自分たちの片付けやすい方法を考えている。プリントなどの提出物が増えても、黒板に示されている文字や絵を見ながら、友達に尋ねながら自分の力でできている。

体育の時間。丁寧に自分の服をたたみ、体操服に着替える。初めての50M走。担任の指示のもと、準備体操をする。「こんなのやったことある?保育園や幼稚園でちゃきーんって。」。子どもたちは、「前へならえ!前へならえ!」と、さっと並ぶ。「こんなのやったことある?」「あるある!」子どもたちは素早く担任の動作をまねる。

50M走は二人ずつ走る。「位置について、よういどん。」の合図で、まっすぐ最後まで走り切ろうとする子どもたち。隣で走っている友達に負けたくないという思いで、どんとどんと友達の方へ寄っていく姿があった。その様子を見ている児童からは、「人の顔見てたら、曲がっちゃうね。」「まっすぐ走るのはこうやんねん(動作で表す。)」と、まっすぐ走るための大事なポイントをつぶやく児童。

児童は、小学校生活が初めてであっても、園で育まれた力を生かし、分からないことは周囲に尋ね、学校生活を創造しようとしていた。また、教科学習においても、自分たちの思いや願いを持ちながら臨もうとしている姿が見て取れた。

園で十分力を身に付けてきた児童にとって、例えば、子どもたちが既に知っている、あるいは、身に付けている内容を丁寧になぞるだけの授業展開や、先生と一人の子どもとのやり取りに終始する全体交流においては、十分に自己を発揮することができることができない。また、「静かに座ること」、「姿勢よく話を聞くこと」、「発表では返事をし、いすを中に入れて発言すること」等、学習規律を優先されることで、子どもの学びに向かう気持ちにブレーキがかかるということが考えられる。

児童の姿からわかることは、幼児教育と小学校教育の円滑な接続で重視すべきことは、新しい環境に適応するというのではなく、小学校の教科等において、資質・能力をどのようにつなぐのかということである。資質・能力をつなぐ教科等での指導の工夫は、子どもが小学校生活を生き生きと過ごせるかどうかのカギとなる。

(2) 幼児期の言葉の育ちを手掛かりとして、上記課題を改善する手立ての検討

保育園の5歳児の朝の会の様子を参観した。

(注3) クラス全員で、毎日、夏のしりとりをしている。黒板には、なつ⇒つり⇒りんごあめ⇒めろんそーだ⇒たこやきの文字が並んでいる。今日は、たこやきの続きである。

T「夏の屋台でたこ焼き食べたいと言っている人いたもんね。本日は“き”。」

C「きつね。」C「きつねうどん。」

C「“ん”ついたで。」

C「屋台のきつねうどん。」「あ！最後に“ん”ついちゃった！」

T「たいへん！あれ、しりとりルールなんやっただけ。」

C「“ん”ついたらだめ。」

T「残念でした。夏のもので“き”のつくものは？」

C「きつね。」きつねとつぶやく子多数。

C「きつねって冬にでるで。」

C「ちがうで、秋やで。」

C「雪やこんこ、あられやこんこ。」(歌う児童)

T「ヒント、後ろを見てごらん。」

園児は、後ろを振り返り、自分たちがきゅうりを育てたプロセスを写真や言葉でまとめた掲示物を見る。

C「あ！きゅうり。」C「きゅうり！」「きゅうり。」

口々に言う。夏の言葉のきゅうりを発見し、子どもたちは、「きゅうり。」「きゅうり。」と叫びながら飛び跳ねて喜びを全身で表す。

C「秋には、りんごもでてくるね。」

T「今日のなつの言葉は“きゅうり”でした。続きはまた明日。」

C「きもの。」

C「あ！ゆかた。」

園児は、これまでの経験からしりとりのルールを理解しており、夏のしりとりは、これまでの経験を生かした、全員が協働して解決できる程度高いハードルの課題設定である。このことが園児の「やってみたい」を喚起していた。

また、夏という条件をつけることで、園児は言葉と体験を結び付けながら思考をめぐらしていた。歌と結び付けながら考えている姿から、園児にとって、きつねは冬のイメージであることがうかがえる。保育者と園児の一问一答とは異なり、保育者は園児の自由な発言を見守り、つなぐ役割に徹していた。そのような環境をつくることで、園児は自由に発言し、友達の発言に耳を傾ける姿となった。“き”のつく言葉が見つからない様子を捉え、保育者はヒントを出し

た。保育室の後方には、「きゅうりのきろく」が写真とともに掲示されており、園児自身で夏の“き”の付く言葉を発見できた。夏野菜を育てた経験と言葉が結びついた瞬間である。椅子から立ち上がり、「きゅうり」と口々に叫びながら飛び跳ねる姿から、きゅうりは自分たちが育てた夏の野菜であり、夏のイメージをもった意味のある言葉として獲得されたことがうかがえる。

幼児期は、遊びや生活の中での豊かな経験を通して、そのことについて話したり聞いたりする中で、語彙を増やし、言葉を使いこなす力を育てていく。園児は、きゅうりを見つけた後も、さらにきものという言葉をはらめき、きものから夏のイメージであるゆかたを連想している。言葉を見付け、他者と喜びを共有した経験が、園児の言葉に対する感覚を豊かにし、そして広がりのあるものとしていた。

(3) 幼児期の言葉の育ちを手掛かりとした、入門期の指導の改善の方向性

幼児教育の基本は、環境を通して行う教育である。幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる。そのため、保育者は、一人ひとりの幼児が、主体的に環境と関わることができるよう、幼児の意識や必要感、興味を踏まえて、連続性を保ちながら遊びが展開するよう環境を構成していく。子どもの学びは、日々の遊びや活動の中で、子どもが心を動かし、主体的に遊びを繰り返し、充実感・満足感を味わい、また、心を動かすという学びが展開していくことを通して、繋がりが深まっていく。そして、そのプロセスの中に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が絡まり合って出現していくのである。幼児期が主体的に遊びを繰り返し、充実感・満足感を味わうことで学びが展開していくのであれば、そのつながりの中にある小学校第1学年も同様である。教師主導の一方的な授業ではなく、一人ひとりの児童が主体性を発揮して活動を展開していくことができるような工夫が重要である。また、幼児は身近なもの・人・ことと

の関わりの中で、興味をもって様々な活動を展開していくことを踏まえると、小学校第1学年においても、学習の素材は身近なものを扱うことが大切である。

これらを前提としつつ、小学校においては、教科等の見方・考え方を踏まえ、その教科における資質・能力を身に付けられるような単元を構想する。単元を構想する際は、画一的な一斉指導を行うのではない。幼児教育においては、一人ひとりの発達の特性に応じた指導を重視しており、従前から、令和の日本型学校教育で示されているような個別最適で協働的な学びは行われている。発達のつながりを踏まえると、小学校第1学年における個別最適で協働的な学びを授業の中で一層意識することが重要である。

(4) 言葉の育ちに関する理論的背景

上述してきた幼児・児童の姿とそこから得られた改善の方向性は、先行研究とも符合するところが多い。

内田(2020)は、幼児の語彙力についての調査結果分析を踏まえ、次のように述べている。「語彙得点は保育形態の違いによって差が優位となった。小学校の教育を先取りしたスタートカリキュラムを導入して文字や計算を教えている一斉保育の幼稚園や保育園に比べて、子どもの自発的な遊びを大事にしている『子ども中心の保育』の幼稚園や保育所の子どもの語彙得点は高い。しかも、3歳より4歳、さらに5歳へと加齢に応じて得点の差が開いていく(中略)。読み書きや語彙と保育形態(一斉保育か自由保育か)には相関関係があり、自発的な遊びを大事にする『子ども中心の保育(自由保育)』の子どもの読み書き得点や語彙得点が有意に高いということが明らかになった。

幼児期には、読み書きや計算は子どもの自発的な必要から遊びの文脈にもちこまれるものであり、大人からトップダウンに教えても覚えられないわけではない。」

またセレスタン・フレネは、言語の自然な習得とは異なる指導の在り方について「話そうとするまえに、書こうとするまえに、人はまず言

語とその書き方の法則を知らねばならぬ(のであろうか:引用者注)。学校教条主義者の主張によれば、それは目覚まし時計の部品のメカニズムのように組み立てられているらしいのです。」と批判した上で、知能も技能も手探りのプロセスによってのみ習得されることを踏まえ、次のように述べている。

「この手探り実験と成功の展望を多様なものにしていくこと、より聡明な生活技術の基盤をそのような仕方で培っていくことが、すなわち教育の役割というものでしょう。」(セレスタン・フレネ、里見訳、2015)

前項で分析してきたように、小学校入学直後の子どもたちは、幼児期に遊びを中心に試行錯誤を繰り返して身に付けてきた資質・能力を十分に発揮し、小学校生活という場で新たな一歩を踏み出そうとしていた。

教師はそうした姿を支える上で、幼児期の育ちを踏まえた支援の在り方を目指すことが一層重要になる。

4. 小学校国語科の教師用指導書に見られる入門期の指導とその在り方の検討

(1) 分析対象の選定に当たって

ここでは、前項までの検討を踏まえた指導の在り方を検討する前提として、小学校入門期の国語科の学習指導の現状を分析する。

本論の冒頭で述べたように、研究授業に向けて作成されるような学習指導案は、入学直後の指導においてはほとんど見られない。そのため、指導内容の実態を把握するための手立てとして、小学校国語科の教科書会社が編纂する教師向けの指導に供する参考資料(以下、教師用指導書)を取り上げることとした。教師用指導書は、教師が授業実施に際して参考となるよう、教科書会社が教材の持つ価値や指導のねらい、指導計画などを具体的に示したものである。

本分析においては、我が国の小学校国語科で最もシェアの高い発行者の1年生上巻の教科書(文部科学省検定済教科書 光村 国語 小学校国語科用「こくご 一上 かざぐるま」、光村

図書）と、その教師用指導書（光村図書、2020）の記述を分析対象として選定した。以下、小学校第1学年上巻の冒頭に位置付けられた入門期の教材を中心として、教師用指導書及び教科書の文章等を引用しつつ分析を試みる。

（2）教師用指導書における入門期教材の位置付けと具体的な記述

①入門期教材の特徴

本教科書には、入学してからの約1か月、児童が国語科の学習の基本を学ぶ教材群（以下、入門期教材）が位置付けられている。それ以降の教材と異なり、多くは見開きの2ページで一つの教材が構成されている点が特徴である。

②入門期教材の具体的な指導に関する記述

続いて具体の教材に関する教師用指導書の記述を見ていく。

「おはなし たのしいな」

ア. 教材の概要

本教材は4月中旬に実施する2時間扱いの教材である。入門期教材の2教材目に位置し、入学してすぐの児童が出合うものとなる。見開き2ページの、教室で教師の読み聞かせを聞く児童や、本を選んでいる児童が描かれている挿絵で構成されている。

イ. 主な指導のねらい

読書に親しみ、いろいろな本があることを知ることができる。（〔知識及び技能〕（3）エ）

ウ. 教師用指導書の記述内容

以下、教師用指導書の記述を抜粋する。

【教材設定の趣旨】

学校生活に緊張している児童たちが、まず保育所や幼稚園でも経験してきた「読み聞かせ」から学習することで安心感を持たせたい。新しい友達といっしょに担任教師の読み聞かせを聞くことを大切な学びの基礎づくりとしたい。

【教材の位置づけ】

読書の学習としては「としょかんへ いこう」「としょかんと なかよし」につながって

いく。これらは、自分で読みたい本を探すので、その前段階として本教材では、本を読みたくなる気持ちを喚起するようにしたい。

【指導展開例における主な学習活動】

（全2時間中2時間目）

○教師の選んだ本の読み聞かせを聞いて楽しむ。

○読み聞かせの感想を伝え合う。

○自分たちが選んだ本の読み聞かせを聞いて、楽しむ。

○他に読み聞かせをしてもらいたい本を選んでみる。

【教材の分析】

教科書の挿絵からも分かるように、本活動のポイントは、読み聞かせによって本の世界を楽しむことと、自分で本を選択することの二つである。学習に入る際、まずこれらの挿絵を見ながら、これからの学習に見通しをもち、期待感をもたせるようにしたい。

（3）幼児期の言葉の育ちを土台とした指導の在り方

前掲の教師用指導書の記述を基にした小学校入門期の国語科の具体的な指導の在り方について、以下検討を加える。

①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導

本教材やそのねらいは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と1対1対応するものではないが、特に以下の姿との関わりが深いと考えられる。

（9）言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

こうした姿を踏まえて入門期の指導を展開するに当たっては、教師用指導書が指摘するように、「新しい友達といっしょに担任教師の読み聞

かせを聞く」ことが「大切な学びの基礎」であるといった認識が重要なものとなる。幼児期の終わりまでに培ってきた「絵本や物語などに親しみ」、「言葉による伝え合いを楽しむ」姿は、姿勢を崩さずに読み聞かせを正確に聞き取ろうとする姿よりも、むしろ身を乗り出して読み聞かせを聞こうとする姿として体現されるものであろう。一斉指導のための学習規律を優先し過ぎる指導に陥るのではなく、こうしたより主体的な姿を重視することで「言葉による伝え合いを楽しむ」姿を十分生かした小学校第1学年の学びを引き出すことが可能となる。

②国語科の指導のねらいの実現を図る指導

教師用指導書に示す指導のねらいは、小学校学習指導要領第2章第1節国語の以下の指導事項によるものである。

第1学年及び第2学年〔知識及び技能〕(3) エ 読書に親しみ、いろいろな本があることを 知ること。

この指導事項について、その趣旨を解説する『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』(以下、『解説国語編』)では次のように述べている。

「第1学年及び第2学年では、読書に親しむことに重点を置いている。読書を通して、様々な知識や情報を得たり、自分の考えを広げたりすることができる力の育成を目指し、日常的に読書に親しむようにすることが大切である。そのためには、読書を通して、新しい知識を獲得したり物語の世界を疑似的に体験したりできる読書の楽しさや面白さを感じる事が大切である。」

この解説でも、「読書の楽しさや面白さを感じることが大切である。」としており、幼児期の言葉の育ちを踏まえた資質・能力を重視していることが分かる。そのためには、入学して間もない児童を一律の姿にそろえることに意を用いるよりも、一人一人の「読みたい。」「読み聞かせを聞きたい。」といった思いをいかに喚起するかが重要になる。

教師用指導書の【教材の分析】においても、

「本活動のポイントは、読み聞かせによって本の世界を楽しむことと、自分で本を選択することの二つである。」という資質・能力が挙げられている。これは、「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」の「(9) 言葉による伝え合い」に示す「絵本や物語などに親しみながら」、「言葉での伝え合いを楽しむようになる」姿と、『解説国語編』に示す小学校学習指導要領の指導事項の趣旨である「読書の楽しさや面白さを感じる」とを的確につなぐねらいであるとも言える。

③具体的な指導上の配慮点

こうしたねらいを踏まえて指導する上で、教師用指導書の【教材の位置付け】にある「本を読みたくなる気持ちを喚起する」ことの重視、

【指導展開例における主な学習活動】にある「他に読み聞かせをしてもらいたい本を選んでみる」学習活動の位置付けなどは、指導上の重要な要素となるだろう。

教科書の挿絵には、そうした趣旨を具体化する児童の様子が描かれている。

座っている児童だけではなく、後方には立膝の児童や立って絵本を見ている児童など、その様子も様々に描かれている。驚いている表情、にこにこしている表情、姿勢や反応は様々であるが、皆絵本の読み聞かせに聞き入っている。また教室に並べられた本から読み聞かせしてほしい本を選ぶ児童の様子も描かれている。

入門期の児童に付けたい資質・能力を、「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」と結び付けることで、こうした挿絵のどのような児童の姿を目指す姿として児童と共有すべきなのかも明らかになってくる。

5. 新小学校教科書を活用した入門期の指導の在り方の検討

(1) 検討の対象とする教科書教材

これまでの検討を踏まえ、令和6年度以降に使用される小学校国語の教科書(以下、新教科書)における入門期教材を取り上げ、その指導の在り方を検討していく。本論考では、前掲の

教科書の発行者による新教科書（文部科学省検定済教科書 38 光村 国語 113 小学校国語科用「こくご 一上 かざぐるま」, 光村図書）を取り上げることとする。（注4）

（2）検討の柱

これまでの分析を基に、以下の柱を立て改善案を検討していく。

①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた、国語科における資質・能力の捉え直し

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、前述の3（3）で述べたように、子どもが心を動かし、主体的に遊びを繰り返し、充実感・満足感を味わい、また、心を動かすという学びが展開していくプロセスの中に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が絡まり合って出現していく。例えば「自立心」（身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる）や、「協同性」（友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる）などである。そのプロセスにおいて、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになるなど、小学校国語科につながるような言葉への気付きが生まれる。

小学校国語科においては、小学校学習指導要領の〔第1学年及び第2学年〕の内容の(1)に示す指導事項のうち、該当するものを取り上げて指導することとなる。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の例えば「自立心」や「協同性」などを発揮して児童が主体的に学びに向かうことができるよう学習を展開し、当該

指導事項に示す資質・能力をよりよく身に付けるよう工夫することが重要である。

②児童のもの・人・こととの関わりから始まる単元構想

幼児教育では、幼児が身近な環境に主体的に関わり、心を動かし主体的に試行錯誤しながら遊び込むことを通して学びを育む。小学校においても、トップダウンで教材を下ろすのではなく、幼児期に経験したことや、児童の興味・関心を踏まえ展開していくことが重要である。

例えば、生活科における学校探検での気付きや発見を生かして国語科の話すこと・聞くことと関連させるなどが考えられる。

③児童の発想や想いを活かした、教科書教材の柔軟な取り扱い

入門期教材のよさを最大限に生かすためには、画一的に教材提出順に指導するよりも、むしろ児童の発想や想いを生かすことで、適時に関連する教材を取り上げて指導するなど、必然性をもって学習に臨めるようにすることが大切である。そのため、学ぶ教材の順序を入れ替えたり、内容を目の前の児童の実態に合わせてアレンジしたりできる指導計画を立案することが重要になる。

（3）入門期における平仮名学習への改善案

①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた、国語科における資質・能力の捉え直し

幼児は、例えば、お店屋さんごっこの中で、「メニューがいる。」「おすすめって書いたらどう。」など、必要感をもち、50音表を見ながらなんとかひらがなを書こうとする。また、ゆうびん屋さんごっこの中で、文字や絵でやり取りすることを通して、友達や先生に自分の思いを伝えられた喜びを味わう。文字には、その場になくても伝えたいことを伝える役割があるという気付きが生まれる。

小学校国語科では、次の指導事項において、

平仮名の読み書きを指導することを示している。各教科等の学習の基礎となるものであり、第1学年でその全部の読み書きができるようにする必要があると示されている。

第1学年及び第2学年〔知識及び技能〕(1)
ウ 長音、拗音、促音、撥音などの表記、助詞の「は」、「へ」及び「を」の使い方、句読点の打ち方、かぎ(「」)の使い方を理解して文や文章の中で使うこと。また、平仮名及び片仮名を読み、書くとともに、片仮名で書く語の種類を知り、文や文章の中で使うこと。

小学校においては、この指導事項のみを取り上げ、主にひらがなプリントを用いドリル学習的に進められている。また、教科書教材の配列は、長音、拗音・促音、撥音が細切れに配置されており、教師は、児童の学ぶ必要感を加味することなく、トップダウンで学習が進められがちである。これらに鑑み、次の指導事項と言語活動を関連付けながら、展開することとする。

第1学年及び第2学年〔思考力、判断力、表現力等〕B書くこと(1)
ア 経験したことや想像したことなどから書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたいことを明確にすること。
(2)イ
日記や手紙を書くなど、思ったことや伝えたいことを書く活動

②児童のもの・人・こととの関わりから始まる単元構想

児童は、小学校という新しい場所、人、出来事に出会うことでそれを伝えたいという強い思いをもつ。その思いを生かし、児童の“～たい”をつなげることで、児童にとって必然性のある単元構想とする。また、入学直後の生活科と関連付けることで、児童の発見や思いにつながりをもたせることとする。

③児童の発想や思いを生かした、教科書教材の柔軟な取り扱い

単元は子どもの発意を予想した上で組み立て

ることとする。以下、★は予想される児童の発言である。

ア.★「小学校には、どんな部屋があるのかな。」
「探検したい！」

『生活科：学校探検』

・校外を自由に探検する。ものや場所だけでなく、人とも出会う。

「理科室にがいこつがあったよ。とってもこわかったよ。」、「理科室の隣には、たくさんのものが置いてあるお部屋があったよ。なんて言うお部屋かな。」、「職員室には、たくさんの先生がいたよ。先生の名前を知りたいな。」

イ.★「びっくりを友達に伝えたいな。学校ひみつ地図を作ろう！」「職員室の“しょ”ってどう書くの。」

『国語科：ことばをさがそう』

『国語科：かきとかぎ』

『国語科：ねことねっこ』

『国語科：おもちゃとおもちゃ』

・学校探検で、みつけたものを絵や言葉でカードにするという目的をもち、児童の文字をどのように書くのかという疑問を基としながら、ひらがな、拗音、促音、撥音などの表記を関連付けながら学習を進める。

・学習を進める際は、生活科とも関連を図り、生活科1.5時間国語科0.5時間など、柔軟に時間を組む。

ウ.★「友達だけでなく、家の人にも伝えたい」
「他の学年や友達にもお手紙書きたいな。」

『国語科：おばさんとおばあさん』

『国語科：ぶんをつくろう』

「園でやっていたように、郵便屋さんをしてみたらどうかな?」、「学校のひみつ地図に郵便番号を書いてみたらどうかな。」、「本物の郵便局にも行ってみたいな。」(※児童の発想が生まれることを想定し、生活科の単元構想も併せて行う。)

・家の人に、見つけた学校のひみつを伝えるという目的をもち、家の人への手紙を書く。おかあさん、おとうさんなど、長音の表記及び助詞とも関連付けながら学習を進める。

・郵便屋さんが始まることで、国語科の学習の時間だけでなく、休み時間など様々な時間で

学んだことを生かすことができるように工夫する。

エ.★「本物のお手紙を書こう。」

「学校や家の人だけでなく、本物の手紙だったら遠くの人にも届けられるね。」

『国語科：すきなこと、なあに』

・自分が伝えたいこととその理由を友達に知らせる。

「学校で、郵便屋さんをしていることが楽しいです。たくさんの方に手紙を書けるようになったことがうれしいからです。」

・友達に話したことを手紙に書く。

「読みやすいようにきれいな字で書きたいな。」

教科書教材の配列のみに基づいて細切れに学習するのではなく、長期の学習展開にすることは、文字や言葉への興味・関心を持続的・発展的させ、日常生活へも波及することも期待できる。さらに、本物の手紙を書くという経験を通して、自分の伝えたいことを文字を使って伝えることができた自信をもち、自己の成長を自覚することにつながる。

(4)入門期における対話の学習指導の改善案

入門期教材に位置付けられている教材として「よくきいてはなそう」がある。ペアでの対話場面を取り上げ、好きな遊びを尋ねたり受け答えをしたりする言語活動が示されている。

①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた、国語科における資質・能力の捉え直し

本教材においては、以下のねらいを元に指導することが考えられる。

第1学年及び第2学年〔思考力、判断力、表現力等〕「A 話すこと・聞くこと」(1)「エ 話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつこと。」

この指導事項に示されている通り、聞く対象は「話し手が知らせたいこと」のみならず、「自分が聞きたいこと」をも含むものである。すな

わち、相手の話を受動的に聞き取ることに留まるものではなく、より能動的に聞く資質・能力を意味するものであると捉える必要がある。

とりわけ入門期においてより能動的に聞くという能力像を鮮明に描く上では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が重要な手掛かりとなる。例えば、「協同性」（「友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有」すること）や「思考力の芽生え」（「友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付くこと」）、「言葉による伝え合い」（「相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむこと」）などの姿を十分に発揮する中でこそ、「話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞くことをより確実に育成することができるものとなる。

②児童のもの・人・こととの関わりから始まる単元構想

指導事項の趣旨を前述のように踏まえると、児童が「聞きたい」「知りたい」といった思いを抱くことのないままに聞く姿勢やうなずき、話し方・聞き方の話型などを指導するのでは十分ではないことが分かる。3(2)で分析した幼児の姿で言えば、みんなで楽しくしりとり遊びをしたいからこそ、ルールを尋ねたり互いに言葉で伝え合ったりする姿が実現していくこととなる。同じく3(1)でも、入学直後の児童が、分からないことを尋ねて課題の解決を図ろうとする姿が見られた。

一方で、実際の低学年の指導において、対話が「型」としてのみ捉えられ、話型に当てはめて対話を進めるような学びの姿に留まるケースも散見される。児童は型があるから話せる、話し合えるのではなく、伝えたい思いや聞きたい思いがいっぱいに膨らむからこそ対話を進めることができるのである。

入門期の児童の活動の実態を踏まえると、例えば生活科における小グループでの学校探検の直後などはそうした新鮮な思いを抱いて対話をしたくなる場面を設定することができるだろう。その他にも休日明けの午前中の時間、一人一人

が好きな絵本を選んで読んで後などもそうした思いを膨らませて対話することが期待される。ただし、同じような活動であっても、全員が同一の体験をするような場合であれば、「こんなものを見聞きした」といったことを伝え合う必然性は実感しにくくなる。一人一人が強く印象に残ったり感じたりした体験などをもつ場面を選定することが重要になる。

③児童の発想や想いを生かした、教科書教材の柔軟な取り扱い

新教科書教材では、以下のような対話場面が例示されている。

「すきなあそびをおしえて。」

「わたしは、おにごっこがすきだよ。」

「ぼくもすきだよ。」

(以下略)

こうした例示の趣旨を踏まえ、児童が対話したくなるような場面を逃さずに、本教材を活用していくことが望ましい。

前項のように生活科の小グループに分かれての学校探検などを生かす指導の工夫の場合、以下のような展開が考えられる。

ア.前時の生活科の校内探検終了後、次の時間に国語科の学習指導を実施する。

イ.教室に戻ってきた児童たちの間でなされた会話を引き合いに出して、お互いが発見したことを伝え合ってみようと促す。

ウ.対話の一例として教師が児童役になり、他の児童と対話をする。

【対話例】

「発見したことを教えて。」

「トロフィーがいっぱいあったよ。」

「どこにあったの。」

「校長室にあったよ。ぴかぴかしてきれいだったよ。」

「わたしも見に行きたない。」

エ.異なる場所を探検した児童同士でペアになって、発見したことを紹介し合う。相手を替えながら、発見したことを繰り返し伝え合う。

上記のような指導は、教科書教材の話題とは

異なるが、育成を目指す資質・能力は変わらない。

こうしたやり取りを存分に引き出す上では、体験から間を置かずにこの学習指導を行うことが重要になる。そのため、教材の提示順通りではなくとも、例えば生活科の学習と国語科の学習を連続させて行うことができるようにするなど、カリキュラム・マネジメントを十分働かせ、教科間の効果的な関連付けを図った指導を工夫することが重要になる。

また、対話が進むにつれて、以下のようなやり取りも期待できる。

「一番びっくりしたのはどこだった。」

「音楽室だよ。6年生がピアノを弾いていてとっても上手だったからだよ。」

わけを話すことも対話の重要な要素となる。教材配列上では7つ後の教材に「わけをはなそう」が掲載されている。こうした関連する教材も視野に入れた指導の工夫が望まれるだろう。

まとめ

本論考においては、幼児期及び入学直後の児童の姿の分析に基づき、小学校国語科の入門期の指導の在り方を検討してきた。特に、児童の発意をもとに、教科書教材を弾力的に取り扱うことで、むしろ教材のもつ本質的なねらいを生かす指導となる可能性を探ってきたところである。

幼保小の接続が一層重視される中で、小学校の入門期においてはまだ、小学校に早く慣れるためにしつけなければならない、もしくは、児童の個人差を埋めなければならないという意識の下に指導がなされる傾向も見られる。その結果、整然と揃えること自体に重きが置かれがちになる状況が見られる。責任感をもって指導すればするほど「揃えられない」児童を顕在化させてしまうことにもつながりかねない。また、小学校現場においては、教科書教材を弾力的に取り扱う良さを認識しているものの、限られた時間数で見通しをもって指導したいという教師の思いから踏み出せない状況もある。しかし、幼児期に見られた育ちを十分に生かした指導を

行うことで、一人一人のよさが見えてくる。揃っていないくとも、むしろ揃っていないからこそ一人一人の思いや意志が強く表れる行動を引き出しやすくなる。それだけではなく、その力を発揮しながら自覚的な学びへ転換していくことができる。教師が考えている以上に思慮深く行動し学ぶ子どもの姿にはっとさせられることも多くなる。

そのためにも、小学校の教師が幼児期にどのような学びや経験があるのかを知ることが大切である。また、幼児教育関係者も小学校に分かるように言語化して伝えることも求められる。そして、教師が教えるという視点を超えて、子どもがどのような力を発揮しているのか、具体的な姿から検討していくことが重要である。そこから、教師はどのような手立てを講じるのかを中心に据えた指導の構想が明らかになると考える。

注

- 1) 幼稚園教育要領第1章総則第2においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が10項目にわたって掲げられている。
- 2) 本実践は、彦根市立城東小学校教諭、中村真弓氏によるものである。また、本実践は滋賀県教育委員会が独自で行っている「学びに向かう力推進事業」と兼ね、文部科学省の委託を受け、令和4年度から展開している「幼保小の架け橋プロジェクト事業」の一環として行われたものである。
- 3) 2)に同じく、事業の一環として行われたものであり、本実践は、社会福祉法人愛育会るんびに一保育園保育士、福永泰子氏によるものである。
- 4) 本教科書を用いての分析は、各採択地区での教科書採択が完了した後に行ったものである。

引用・参考文献

- 村地和代 水戸部修治「幼児教育の成果を踏まえた小学校国語科における低学年の学習指導の改善に関する検討」『京都女子大学教職支援センター紀要第5号』,2022,pp.167-178
- 内田伸子「早期教育の光と影」『教育心理学年報第59集』,2020, pp.255-256。

セレストン・フレネ, 里見実訳『言語の自然な学び方』, 2015, 太郎二郎社エディタス, pp.10-16。

『小学校国語 学習指導書 1年』, 2020, 光村図書。

謝辞／付記

本論文の執筆と公表に当たり、社会福祉法人愛育会るんびに一保育園及び福永泰子氏並びに彦根市立城東小学校及び中村真弓氏には掲載について御快諾をいただいた。ここに記して御礼を申し上げる。また本論文は、JSPS 科研費 JP21K02534 の助成を受けたものである。